

ハイデルベルク信仰問答講解説教40「父母を敬うとは」(2012年6月24日 礼拝説教)

【聖書箇所】

父に聞き従え、生みの親である父に。母が年老いても侮ってはならない。真理を得よ、知恵も論しも分別も手放すな。神に従う人の父は大いに喜び躍り／知恵ある人の親は、その子によって楽しみを得る。父が楽しみを得／あなたを生んだ母が喜び躍るようにせよ。(箴言23:22-25)

子供たち、主に結ばれている者として両親に従いなさい。それは正しいことです。「父と母を敬いなさい。」これは約束を伴う最初の掟です。「そうすれば、あなたは幸福になり、地上で長く生きることができる」という約束です。父親たち、子供を怒らせてはなりません。主がしつけ論されるように、育てなさい。(エフェソ6:1-4)

【説教】

今日は、十戒の第五戒「あなたの父母を敬え」について、信仰問答を手がかりに考えてみたいと思います。

この第五戒は、信仰問答で言えば、問93で述べられたことでありますが、ここから十戒の第二部、十戒の二枚目の石の板に記された戒めに入ります。一枚目の石の板には、1~4戒までで、わたしたちが神さまに対してどのようにふるまうべきかが記されました。そして二枚目は5~10戒までで、わたしたちが自分の隣人に対してどのような義務を負っているかということでありました。しかしこの二つの石の板に書き記された戒めは、別のことではなくお互いに密接なつながりの中にあります。

福音書で、主イエスは最も重要な掟は何かと問われたのに対して、第一に神さまを愛すること、そして第二に隣人を自分のように愛することを掲げますが、この二つの掟は「同じように重要である」と言われます。つまりどちらが欠けてもいけない。神さまを愛することは隣人を愛することにつながりますし、また隣人を愛することは神さまを愛することにつながります。どちらか一方ということはあり得ないのであります。

それは信仰と生活の関係と言い換えることもできるでしょう。わたしたちの信仰は、必ずその生活に現れてまいります。信仰だけ、生活だけという二者択一的なものではありません。ですからこのことも繰り返し申し上げることでありますが、信仰とは生きることなのです。それは具体的な日々の歩みと関係しています。信仰を現実逃避のように考えた時、あるいはそれが具体的な生き方から乖離していくなら、その信仰をもう一度点検してみなければなりません。

これは実に多くの牧師、神学者が十戒を説教で取り上げる際に語ることでありますが、この十戒の後半、第二の石板の部分は、隣人に対しての務めが記されているけれども、それは単に隣人との関係ではなく、実は神さまとの関係が問題になっている。例えば、「父母を敬え」では、その父母を通して神さまを敬っているかが問われている。もしわたしたちが、自分の両親に対して、そっけない態度をしたり、軽率にあしらったりするならば、その人は神さまに対しても同じような態度を取っていると理解することができるのであります。

また第六戒は「殺してはならない」ですが、それは実際に殺人に及ばなくても、この信仰問答が示すように、隣人を憎んだり、侮辱する行為まで、それは隠れた殺人として含むものであります。もし人が隣人の存在をそのように軽視するということがあれば、わたしたちは神さまを軽視している、神さまを亡き者としている、そう理解することができるのです。第七戒「姦淫してはならない」もそれはそういう愛に破れた状態にあるならば、わたしたちの神さまへの愛もすでに破れているのです。そのように、これは続くすべての戒めにも当てはまります。隣人との関係であると共に、神さまとの関係なのです。

そこで今日の信仰問答に注目しましょう。問104の終わり

にこう記されています。「なぜなら、神は彼らの手を通して、わたしたちを治めようとなさるからです」「彼らの手」というのは言うまでもなく「父母」のことです。その父母、両親を通して神さまがわたしたちを支配されるというのです。神さまの御支配が、単に信仰のことに留まらず、わたしたちの具体的な人間関係を通して現されるのです。

本当にそうでしょうか。でも考えてみますと、神さまとわたしたちの関係は直接的というよりは、むしろ人を介してという間接的なものであります。何よりこの世に命を与えられ、この命が養われることも、それは神さまが直接ではなく、わたしたちの両親を通してなされていることが分かるでしょう。命を育むという、この創造的な神さまの御業に、親は子育てという業を通して参与しているのです。間接的な神さまのご支配がそこにはあるのです。

また神さまの言葉を聴くということも、それは日曜日の礼拝で牧師が御言葉を取り次ぎます。教会に導かれることも、ある日突然、神さまの声を聞いたというよりは、そこには家族や友人、何らかの人との関わりがあるのです。そのように隣人を通して、神さまは間接的にわたしたちに関わりを持たれる。そういう意味で、わたしたちの両親は、わたしたちと神さまをつなぐその最も身近な隣人なのです。けれどもその関係はそんなに単純なものではありません。身近なだけに逆に難しいということもあるでしょう。親子であるがゆえの難しさを感じている人たちも多いのです。

人間の罪は、神さまよりも自分が上になってしまうことです。それはあのアダムとエバの罪を見れば明らかなことです。人間は上に立つ権威に対して極めて反抗的です。親子関係でも然りです。子は親に反抗することで自分の存在意義を確かめようとします。しかも罪の人間の権威は、力関係示すことに終始いたします。例えば、親の権威とは何でしょうか。当然ながら親は知識や腕力、経済の面において子どもより強いのです。そこに親の権威があると考えます。しかしやがてこの力関係が逆転する時が来る。それは親が老いること。親が老いると、子どもは親よりも腕力も経済も強くなります。そういう仕方でも力が逆転し、子は親を支配するのです。罪の人間は上に立つ権威をそのように力関係で捉えるようになります。それは間違った権威であり、しかし、残念ながら世の中に存在するあらゆる権威は、そのような力関係で成り立っているのです。虐待もパワーハラスメントもそのような間違った権威付けの表れです。

ある研究では、この十戒の第五戒にある背景として、カナンの異教の習俗として屍捨てがあったと言います。つまり老いた親を捨てることで飢えを凌ごうとする。かつて日本にもそういう風習がありました。特にパレスチナの砂漠の厳しい環境にあつて、そこに人が長く生きる道を見出したということは十分に考えられることであります。そこでは弱い者が淘汰される。それによって家族が生き延びる。それは力がものを言う現代社会

の縮図ではなく、すべての時代に存在していた人間の心の闇であり、罪の現実なのです。

しかし、そのような現実に神さまの御言葉は臨むのです。「あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができる」その力を用いて老いた両親を捨ててはいけません。それが長く生きる道ではない。その両親を敬い、共に生きることが本当に祝福され長く生きる道なのだ。これは力を権威とするこの世に対して、大きな問題提起ではないでしょうか。

この第五戒は、単に親を大切に、目上の人をねぎらうということではなく、極めて人間の尊厳の問題。それは人生を長く生き、老いて、健康も能力もすべてを失っていくそのような人間の尊厳をも見失わないこと。それに敬意と愛と誠実をもって接すること。それに服従し忍耐する自由を持っているか。そこが問われているのです。主イエスが言われた。「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」この最も小さい者へどれほど誠実に仕えることができるかなのです。

そして言うまでもなく、この最も小さい者へ愛と誠実をもって仕えてくださったのは神さまであり、その証拠に独り子をわたしたちに与えられたのであります。神さまに背き、反抗し、御前に全く価値のないものと思われるような小さいわたしたちのために自らの命を献げられたのです。わたしたちが神さまに仕えるのは、そのようにこの最も小さな者に注がれた愛の大ききゆえです。だからこそ、わたしたちはこの神さまの権威のもとに喜んで服し仕えるのです。神さまを畏れ敬い、服従するのは決して力によるものではなく、この小さな者のために命を献げられた神さまの愛によるものです。神さまの権威は力ではなく、愛による恵みの支配です。これがわたしたちの親子の関係の中に求められていることではないでしょうか。先ほども申しましたように、親は間接的に神さまの御支配を現すのです。だからこそこの神さまの愛のご支配があって、初めて子は親を敬うのです。喜んで従うのです。

先日、何気なく神学生時代に読んだアウグスティヌスの『告白』に目がとまり読んでおりました。ぜひ皆さんにもおすすめしたい本です。アウグスティヌスの子どもの頃からの回想で、彼は奔放な生き方をして、若い頃は盗みをしたり、結婚していないのに女性と暮らしたりします。またマニ教という宗教に入信する。当然、親は心配するのです。父親は早く亡くなったようですが、母親モニカはこの息子を嘆き、涙ながらに祈るのです。ある時は、教会の司教のところへ相談に行く。あまりにしつこく母親が息子にあって息子を説得してほしいと泣いてせがむので、司教は「あなたが生きているかぎり、このような涙の子は決して滅びることはない」と言って慰めたという話が出てきます。この母親の祈りがあって、やがて息子アウグスティヌスは回心しました。その回心を見届けて、死の間際に母親は息子にこう言う。「あなたが地上のあらゆる幸福を捨て神の僕となったのを見るのが出来た。わたしはもうこの世で何をしようか」と。アウグスティヌスは親に苦勞をかけますが、最後にして最大の親孝行をしました。

そこには息子のために祈り続けた母親の愛があったことを忘れてはなりません。回心したアウグスティヌスが立派なのではない。この放蕩息子のために、この小さいもののために祈り続けた母親の愛が息子をそのように回心足らしめたのです。

現代の親子関係はより複雑かもしれません。でも基本的なことはあまり変わらないと思います。子が従わないことを嘆く前に、親がまず自らの愛を点検することから始めなければなりません。力で押さえつけてこなかったか。間違った権威を振りかざしてこなかったか。そして何よりも子どものために祈ってきたか。今からでも遅くありません。母モニカのように祈りを始めましょう。その涙を神さまは決して無駄にされないう。お祈りいたします。